

審査の結果の要旨

氏名 白川蓉子

本論文は、フレーベルのキンダーガルテン実践を（１）フレーベルがドイツのブランケンブルグに創設しドイツ各地に広めた実践（オリジナルな実践）、（２）フレーベルの没後、フレーベル運動によって欧米、日本に普及した実践（フレーベリアン・オーソドックスによる実践）、（３）１９世紀末から２０世紀初頭にかけて改革された実践（改革派による実践）の三つに峻別し、「オリジナルな実践」の本質的な意義とその変容について歴史的に探究している。本論は、序章、終章を含む６章で構成されている。

本論は、序章においてフレーベルの文献学と研究史の検討を行った後、第１章では、フレーベルのキンダーガルテン実践の成立過程をたどり、その前史となるカイルハウ実践と『人間の教育』の哲学との連続性においてブランケンブルグのキンダーガルテン実践が成立した経緯を、彼の戦争体験による契機とその後の哲学的思索によって解明している。

第２章では、オリジナルなキンダーガルテン実践として「遊具・作業具」による「遊び」と「作業」、「運動遊戯」「自然との関わり・栽培活動、砂場遊び」「言葉、お話、読み書き」の実践の具体的様態が、日誌や手紙などの諸資料を渉猟して精緻に描出されている。

第３章では、「オリジナルな実践」の「遊び」と「作業」に焦点化し、「子どもの内的生命の表現」の発達の意義と認識論的基礎、キリスト教神学の思想的基盤、およびそれらの教育学的意義についてフレーベルの著述に即して探究している。

第４章では、ドイツ、イギリス、アメリカ、日本におけるフレーベル・オーソドックスが「オリジナルな実践」を十分に認識しえないまま普及運動を展開した事情を示し、普及における定型化による「オリジナルな実践」の変容について考察している。さらに終章においては、変容した実践に対するデューイとキルパトリックの批判、モンテッソーリ・メソッドとの近似性が再検討され、「オリジナルな実践」の歴史的意義とその継承の可能性について探究している。

本論は、東西ドイツ統一後の条件を踏まえた資料探索と再解釈に挑戦し、実践そのものの記述分析を基底にすることによって、『人間の教育』の哲学的解釈に傾斜してきたフレーベル研究が等閑視してきた彼の実践的思索を解明するとともに、「フレーベリアン・オーソドックス」によって広められてきた幼児教育実践とフレーベル自身の「オリジナルな実践」との差異を開示することに成功している。特に「ガーベ（恩物・遊具）」を媒介とする「予感」によって「考え、行為し、感受して」、世界（自然・人間・神）の本質にいたる認識活動の考察は、思考や学びの基礎を形成する乳幼児の教育にとって貴重な示唆を含んでいる。

このように本論文は、フレーベルの幼児教育学を「オリジナルな実践」の精緻な考察から再検討することによって先行する哲学的研究の水準を更新するとともに、欧米と日本に普及し定形化したフレーベル主義の教育実践を「オリジナルな実践」との比較によって再検証するという貴重な成果を導いている。よって本論文は博士（教育学）の学位の水準に十二分に達しているものと評価された。